

国土マネジメントと江戸

利根川東遷の経緯と目的

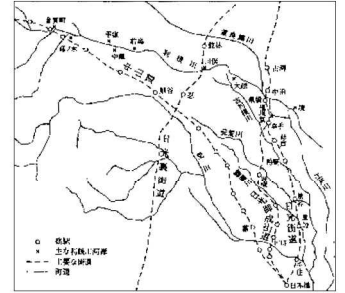


年号	西暦	
文禄 3	1594	会の川締切
元和 7	1621	新川開削と赤堀川開削（新川通の生成、赤堀川は7間開削）
寛永 2	1625	新川通と赤堀川をさらに3間増幅
寛永 6	1629	久下地点で荒川を和田吉野川筋に落とす
寛永 12 ~18	1635 ~41	江戸川の開削
寛永年代	1624 ~43	浅間川を高柳地点で締切、佐伯堀の開削
承応 3	1654	赤堀川をさらに3間の幅のない3間の幅で深く掘られる。 (この後、通常時、水が流れるようになった)
元禄 11	1698	赤堀川の川幅27間（約49m）、深さ2丈9尺（約8.7m）
天明 3	1783	浅間山大噴火（この降砂が利根川河道に流入。この後、利根川の河床が上昇して利根川河道は一変する）
文化 6	1809	赤堀川が拡幅されて40間（約73m）となる。（上利根川洪水の中・下利根川への本格的な流入はこの時から）
天保 14	1843	赤堀川の拡幅工事
明治 4	1871	赤堀川香口の切上げ工事
明治 42 ~昭和 5	1909 ~30	近代改修事業（この後、上利根川の大洪水が中・下利根川に流下するようになる）

■目的

利根川東遷は埼玉平野の開発に非常に大きな影響を与えたが、近世初期の赤堀川の開削・拡幅の直接的な目的は日光街道、中山道の整備であったと考えている。近世後期は、埼玉・島川流域及び渡良瀬川下流部の排水が東遷事業の重要な課題となった。なお近世中期まで、江戸を襲った利根川の大洪水は、赤堀川よりかなり上流の中条堤、右岸堤の決壊によるものである。

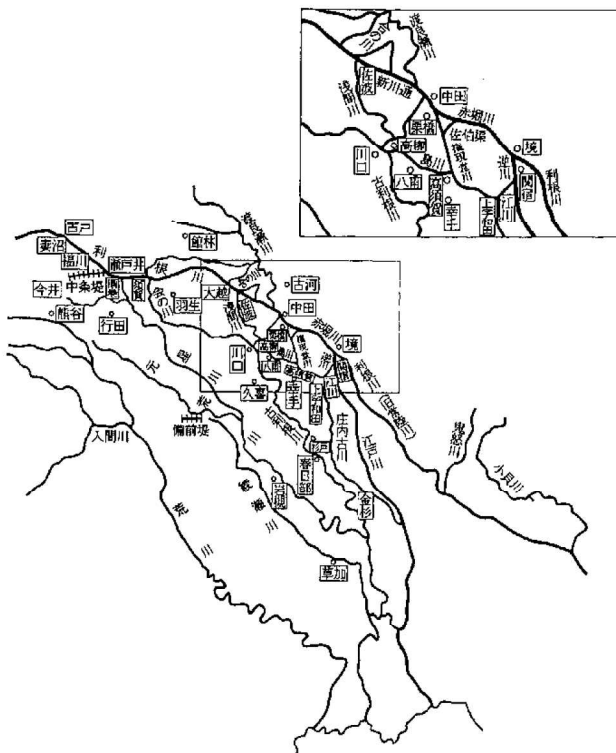
また利根川河道は、舟運路であった。特に上野国（群馬県）、下野国（栃木県）にとって江戸を結ぶ重要な舟運路であった。近世前期、盛んに生産された足尾御用銅は利根川舟運によって江戸にまで運搬された。



河川・街道概略図



「総下州赤堀川切広之図」（埼玉県立文書館収蔵／田口栄一家寄託）



利根川河川地理概略図



「江戸初期 下総之国図」（船橋市西図書館蔵）

赤堀川、江戸川、日光街道が記載されていない、村落名、国・郡境の配置等から赤堀川開削以前の近世初頭の状況を表した図面と考えられる。興味深いことに、利根川水系と常陸川水系は関宿で既につながっている。